metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Hiroshima University Institutional R

総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集
Vol. 33, 2017, 93-102

資　料

学生支援のための学内研修における保健管理センターの役割に関する考察

磯部　典子[1)]

The role of the Health Service Center in Faculty Development in supporting students

Noriko ISOBE[1)]

Key words: student support, faculty development, counseling, mental health, faculty cooperation

Ⅰ．はじめに

2000年文部省（現文部科学省）高等教育局は，「大学における学生生活の充実方策について―学生の立場に立った大学づくりを目指して―」（通称「廣中レポート」）[1)]を発表し，今後の大学のあり方として「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への視点の転換を提言した。「学生の立場に立った大学づくりを目指す」よう教職員に意識改革を促し，学生相談は全ての学生を対象とした大学教育の一環として位置づけられ，学生の人間形成を促すものとして捉え直された。これによって，学生相談に応じることは全ての教職員の基本的責務という認識が広まった。

廣中レポート以降，学生支援の重要性は益々高まっている。学生の多様化にともない，相談の増加とその内容の複雑化も進んでいる。2007年独立行政法人日本学生支援機構（以下，「日本学生支援機構」とする。）は，「大学における学生相談体制の充実方策について―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」―」[2)]を公表し，多様な学生のニーズにこたえるため，すべての教職員と専門家との連携・協働を提唱した。

これにともなって，教職員が学生支援に関する知識やスキルを得るための学内研修の必要性も増しているが，保健管理センターが関与した実践の報告は少ない。そこで，本稿では，広島大学（以下，本学という。）で実施されている学生支援系の研修の中で，保健管理センター（以下，当センターという。）が関与してきた学生相談・メンタルヘルス研修の取り組みについて報告し，教職員を対象とした学内研修において保健管理センターが果たすべき役割について検討する。

Ⅱ．学生相談・メンタルヘルスに関する研修―本学の取り組み

日本学生支援機構が全国の各大学，短期大学及び高等専門学校1,183校を対象として実査した「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）」[3)]によれば，対応が困難な事項と

1）広島大学保健管理センター
1）Health Service Center, Hiroshima University

著者連絡先：〒739-8514 広島県東広島市鏡山1-7-1　広島大学保健管理センター

して，最も増加しているのは「メンタルヘルス」問題で，「メンタルヘルス」に関する教職員に対する研修を実施している大学は，前回調査（平成22年度）では大学全体で26.3%（国立大学で53.6%）であったものが，平成25年度は大学全体で32.5%（国立大学で64.7%）となっている。また，学生相談において，学生の悩み等について増加している問題は，「発達障害」が59.0%で最も高く，次に「対人関係」56.7%，「精神障害」54.3%の順となっている。学生相談にかかわる教職員等の知識・技能の向上のため実施している取り組みとしては，「担当者に学協会等の研修を受講」が55.8%で最も高く，次に「担当者に日本学生支援機構の研修会を受講」が50.6%，「学生相談に特化していないが，学内のFD（Faculty Development 大学教員の教育能力を高めるための研修）・SD（Staff Development 事務職員の能力向上のための研修）で実施」が41.1%の順となっている。

大学全体としてメンタルヘルスや発達障害に関する問題が増加しており，教職員を対象とした学内研修を行う大学も増えている現状が認められる。本学においては，これまで毎年複数回，学生相談およびメンタルヘルス問題に関する学内研修を実施してきた。以下，本学における取り組みを報告する（表参照）。

学生支援教職員研修

本学の主に学生生活・学生支援を担当する教職員を対象とした研修会で，年1回開催。テーマは，年ごとに，学生支援に関するトピックスが選ばれる。メンタルヘルスに関連するテーマで開催されるときは，保健管理センタースタッフも，講師やコメンテーターとして協力している。

チューター研修会

本学において，学生の担任の役割を担うチューター教員のための研修会。毎年3月に，チューターを対象として開催される。実際の学生支援において，チューターと当センターとの連携はもっとも多く，例年，当センターも講師として協力し，プログラムの中で学生相談やメンタルヘルスに関する講義を担当している。

メンタルヘルス相談研修会

2014年度より当センターと全学FD部会主催で始まった研修会で，本学の「新任教員プログラム」対象教員の必修となっている。新任教員を対象に，学生の心身の健康に関する基本的知識と対応・支援方法について学ぶことを目的としており，当センタースタッフが企画および研修の講師を務めている。

学生相談シンポジウム

当センターカウンセリング部門主催で開催している研修会。学生相談に関するテーマを選び，学外より専門家を講師として招いて講演会やシンポジウムを行っている。対象は，本学の教職員と広島県下の大学・短大・高専等の学生相談担当者としている。

メンタルヘルス研修会

当センターメンタルヘルス部門主催で開催している研修会。メンタルヘルスに関するテーマを選び，学外より専門家を招いて講演会やシンポジウムを行っている。対象は，本学の教職員と学外にも広げて開催している。

当センターが主催した過去15年間の学生相談シンポジウムおよびメンタルヘルス研修会についてまとめたものを，文末に資料として添付した。とり上げたテーマで一番多かったのは，学生の自殺防止である。1998年より日本の自殺者が3万人を超え，大学生の死因の第1位が自殺という状況が続いている背景があり，特に2003年～2004年はネットを媒介として全国規模で若者の群発自殺が発生し[4]，学生への影響が懸念された。自殺の心理・予防と対応のテーマは教職員の関心も高く，学生支援におけるもっとも重要な課題であるため，自殺防止の専門家を講師に招いて繰り返し研修を行ってきた。他に不登校・ひきこもり，学生のうつ，発達障害，摂食障害，青年期の心理といった，これも教職員からの要望の多いテーマを選ん

表　広島大学における学生支援系研修会

表　広島大学における学生支援系研修会

研修会の名称	目的・内容	対象者	開催時期
学生支援教職員研修	学生対応の窓口である職員と教員が，本学の教育とそれを支える学生支援の現状と課題について共通理解を深め，協働のあり方を検討することを目的とする。	チューター，指導教員，部局長，新任教員，学生生活担当教員，学生支援担当職員，その他希望者	8～9月
チューター研修会	学生の成績評価，学習相談および生活支援等，チューター業務について理解を深めることを目的とする。	教員（次年度担当チューター）職員（学生支援担当者）	3月下旬
メンタルヘルス相談研修会	新任教員を対象に，研修の一環として，学生のメンタルヘルスについて理解し，学生支援のあり方を考えることを目的とする。	「新任教員研修プログラム」対象の教員，その他希望者	8～9月
学生相談シンポジウム	学生と身近に接する教職員が，学生相談に関する知識とスキルを習得することを目的とする。	チューター，指導教員，職員，その他希望者	8～9月
メンタルヘルス研修会	学生のメンタルヘルスに関する知識・情報を得て，理解をすすめるとともに，早期対応，支援方法を検討することを目的とする。	チューター，指導教員，職員，その他希望者	2～3月

で企画してきた。また，学校保健安全法の改正（第26条：事故，加害行為，災害等による危険防止と発生時の対処等，学校安全に関する責務）を踏まえて，事件・事故への危機対応をテーマとした研修も行っている。さらに，学生相談・学生支援を積極的に行っている大学から講師を招き，その取り組みを学ぶ研修も企画した。

上記は，全学の教職員を対象とした研修であるが，その他，各学部・研究科において実施されているFD活動があり，当センターが直接部局の要請を受けて行う研修もある。部局主催のチューター勉強会や，部局によっては，部局の教職員を対象にしてメンタルヘルスについての研修会をもっているところもあり，それらの研修会に当センタースタッフが講師として協力している。

さらに，定例的に開催される通常の研修の他に，重要な研修として，事件事故が発生したときに緊急に行う危機対応時の研修がある。キャンパス内で起こる事件事故や自殺関連の問題では，影響が広範囲の学生に及ぶこともあり，事後対応の過程で，当該部局の教員会等に出向いて当センタースタッフが研修を行う場合もある。

Ⅲ．学生支援教職員研修アンケート結果から

ここでは，学生支援教職員研修アンケート結果（「広島大学全学FD活動実績報告書」大学の研究活動の記録文書 ）をもとに，過去４年間（2012-2015）の学生支援教職員研修の「テーマ」「形式」「時間」「教職員参加者数」「満足度」および「研修に参加した動機」についてまとめ，比較を試みた。

2012年度の研修テーマは「留学生支援，学生のメンタルヘルス，学生のモラル」で，グループワークの形（３時間45分，参加者23名）で開催され，76%の参加者はグループワークにまた参加したいとアンケートに答えた。参加者の動機について，最も高い動機は「業務に関係があると思ったから」（31.3%）で，その次は「グループワークに興味があったから」（18.8%）であった。

2013年度のテーマは「学生の規範意識向上の為に学生支援教職員に求められること」で，講演とグループワークの形（３時間，参加者30名）で開催され，50%の参加者はグループワークにまた参加したいと答えた。研修全体の満足度は83%であった。参加動機で最も高かったのは「業務に関係があると思ったから」（36.7%）で，次は「テーマに興味があったから」（20.0%）であった。

2014年度のテーマは「大学における自殺の予防と事後対応」で，講演とQ&Aセッションの形（３時間，参加者66名）で開催され，研修全体の満足度は92%であった。参加動機で最も高かったのは「業務に関係があると思ったから」（43.7%）で，次は「テーマに興味があったから」（26.8%）であった。

2015年度のテーマは「障害のある学生への支援」で，講演とQ&Aセッションの形（３時間，参加者84名）で開催され，研修全体の満足度は89%であった。参加動機で最も高かったのは「学生支援・相談に悩みがあったから」（39.0%）で，次は「新任教員研修プログラムの教員だから」（26.7%）であった。

１．テーマと研修形式について

学生支援教職員研修では，2012，2013年度と続けて‘グループワーク’形式で研修が企画され，2014，2015年度は‘講演とQ&Aセッション’の形式で企画されている。

2012，2013年度と，テーマに関しては，留学生支援，学生のメンタルヘルス，学生の規範意識という重要な問題を採り上げていたにもかかわらず，参加者数が伸び悩んでいたことから，2014年度は研修形式を‘講演とQ&Aセッション’とした。また自殺予防のテーマであったので，保健管理センター主催の「メンタルヘルス研修会」と「学生相談シンポジウム」の合同企画にして，学外の専門家２名を講師に招いて開催した。

2015年度は，障害者差別解消法（2016年４月より施行）の前年に当たり，国立大学では障害学生への合理的配慮が義務化されることから，この「学生支援教職員研修」と新任教員必修の「メンタルヘルス相談研修会」をタイアップさせて，障害学

生支援をテーマに全学研修を開催した。この研修では，本学の障害学生支援の拠点であるアクセシビリティセンターと当センターが合同で企画を練り，講師も両センタースタッフが担当した。

２．教職員が研修に参加した動機について

2012-2014年度は，業務に関係があると思ったからという参加動機がもっとも多かったが，2015年度は相談に関する悩みがあったからという回答がもっとも多くなっていた。おそらく，それまでの年より，2015年度は教員の参加が多かった（教員51名，職員33名）ことが理由として推測される。この年は，新任教員必修の「メンタルヘルス相談研修会」とタイアップさせ，新任教員28名の参加があったが，実際に問題を抱える学生の対応に悩んでいる教員が，高い動機を持って参加していたことが推測される。

３．参加者数と満足度について

参加者数および満足度ともに，‘グループワーク’形式で行ったときよりも，‘講演とQ&Aセッション’の形式で行ったときの方が高かった。また，単独開催でなく，他の関連する研修会と合同開催することで，参加者の増加が見込まれる結果となった。

2014年度研修では学外の専門家が講演を行い，参加者の満足度も高かったが，研修後アンケートの自由記述に，「本学において行われている支援についても知りたい」「事例をもとにした話が聞きたい」という要望があったことから，2015年度研修では，学内講師で講演を３題行った。うち１題は，本学において当センターと教職員が連携して支援した事例（発達障害２例，精神障害１例）をもとに講演を行った。研修全体の満足度は89％（大変満足37%，だいたい満足52%）であったが，この事例をもとにした講演の満足度は96%（大変満足56%，だいたい満足40%）であった。「学生の抱える問題についての理解も，事例をきくとイメージがしやすかった」「自分のよく知らないテーマで不安であったが，事例を通して対応法がわかった」「このような事例をプライバシーに配慮しながら共有できるとよい。事例の共有が進めば支援がより進むと思う」という感想もあった。

一方，アンケート結果で，不満があるという理由として，研修時間が長いという回答が毎年寄せられている。

Ⅳ．考察

学生支援系の研修については，研修の効果の検証はなかなか難しく，また，参加者が少ないことが主催者側の悩みである。本学における取り組みを振り返り，どのような研修が教職員にとって役立つのか，必要であるのか，そして，保健管理センターの役割は何かについて，以下，考えてみたい。

１．研修のテーマについて

学生相談・メンタルヘルス研修のテーマに関しては，大きく分けると，①メンタルヘルスに関する基本的知識・対応について学ぶ研修，②法律の施行や改正を踏まえた研修，③現場で増加している問題，困っている問題に関する研修，の３つが必要とされていると考えられる。これらの内容を，全学研修，部局研修，関係者研修と，さまざまな機会をとらえて打つことになる。本学では，①は，新任教員の必修研修となった。

Ⅲ－２の結果から，研修への参加動機として，実際の業務の中で相談に悩みを抱えている教職員が参加している比率が高いことが明らかになった。今後の課題として，研修テーマについてのアンケートを実施し，教職員の悩みに対応したテーマで企画することを検討したい。

２．研修形式について

学生支援系の研修では，なるべく多くの教職員に基本的な知識・スキルを習得してもらうことが優先される。参加者があまりに少ない研修では，役目を果たせない。学内研修では，教職員が参加しやすい研修を目指さなければならない。今日，大学教職員は多忙をきわめており，Ⅲ－３でも示したように，研修時間が長いという意見が毎年あるので，このことを考慮した研修を企画する必要

がある。

ワークショップ型の研修は，知識や技術を深く習得するために有効とみなされているが，Ⅲ－１の結果から推測されるように，この形式で研修を打つと参加者は少なくなる。講演とQ&Aセッションを組み合わせた形式のものが，一般の教職員にとっては参加しやすいと推測される。

３．参加者の満足度を高めるために

Ⅲ－３の結果に示されたように，講演の中に具体的な事例をもとにした内容を盛り込むと，参加者の満足度は向上する。個人情報保護の観点から，研修で提示される事例は架空事例が一般的である。しかし，参加者からは，架空事例よりも本学で支援した事例が聞きたいという要望が強い。実際に支援したケースであるという事実が参加者にもたらすインパクトは大きく，研修へのコミットメントも深まる印象がある。事例に関してはきわめて慎重に取り扱わなければならないが，学生個人や部局が特定されないようにして「プライバシー保護のため，主として対応についてまとめ，他は省略する」という形で，「事例から学ぶ」研修は，今後も企画する必要がある。

また，心理的に，身近に起こっていることは大きな影響力をもつ。学内のある部局で行っていることは，前例として他の部局も参考にしやすく，支援が進む効果がある。特に，障害学生支援では，合理的配慮について課題が多く[5)]，支援の進み具合も部局によって差があるが，研修の機会に先駆的な取り組みを行っている部局の事例を共有することによって，他の部局への波及効果も期待される。

４．保健管理センターの役割について

学生の対応に悩む教職員に対して，直接的な支援となるのは，当センターが相談業務の中で行っている教職員コンサルテーションである。それに対して学内研修は，間接的支援といえるであろう。本学においては，特にキャンパス統合移転後から，問題を抱えた学生を，チューターや指導教員，学生支援担当職員と当センターとが連携・協力してサポートしてきた歴史がある。当センターカウンセリング部門における教員コンサルテーション数（教員からの学生に関する相談）は，この20年間で約５倍に増え，近年は実数で100名前後を推移している。保健管理センターが学内研修において担うべき役割は，教職員たちと共に取り組んで来た支援の実際を，研修の機会を通じてフィードバックすることではないかと思う。

事件・事故対応では，以前，教員から「例えば一つの学部が何か事件対応を行っていても，他の学部の教員はそのことを全く知らない。同じような事件が自分の部局で起こると，初めての対応を手探りですることになる。経験を共有することができないのが大きな問題だと思う」という意見を聞いたことがある。プライバシーの保護には万全を尽くさなければならないが，このような問題に関しても，当センターが部局の教職員や学内の専門相談施設と連携して行ってきた対応・支援について，学内研修会で報告し共有することは，点と点をつないで線とするような意味をもつ。当センターがつなぎの役目を果たすことで，様々な部署を超えて支援に関する知識やスキルが共有され，全学的な学生支援力の向上に寄与できるのではないだろうか。

最後に，私見であるが，われわれのこれまでの経験から，研修の効果がもっとも上がるのは，定例的に開催される全学研修よりも，危機対応時に関係者を対象として行う研修である。これは，参加する教職員が関係者であり，研修へのモティベーションがきわめて高いことがその理由で，例えば，自殺関連問題の研修は，危機対応時に行うときが最も教職員に浸透し，予防教育という意味でも効果が高い[6)]。部局から要請があったときに，迅速に対応できるような準備を日頃からしておく必要がある。

Ⅴ．おわりに

学内研修終了後，参加した教職員が相談に来られたり，後日，当センターのカウンセリング部門やメンタルヘルス部門の方に相談があったりということは決して珍しくない。学生に生じている異

変に最初に気づくのは，学生と身近に接している教職員である。深刻な問題を抱えていても自ら相談に来ない学生の支援は，教職員との連携抜きには行えない。学内研修は，学部・研究科の教職員と学内の専門相談部署とがお互いに知り合える機会でもある。保健管理センターで働くわれわれも，今後も引き続き，現場で蓄積した経験をもとに，積極的に研修に関わっていきたいと思う。

文　献

1）文部省高等教育局・大学における学生生活の充実に関する調査研究会：大学における学生生活の充実方策について―学生の立場に立った大学づくりを目指して―（報告書）, 2000.

2）独立行政法人日本学生支援機構：大学における学生相談体制の充実方策について―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」―（報告書），2007.

3）独立行政法人日本学生支援機構：大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）（報告書），2013.

4）上田茂，竹島正，張賢徳，他：Webサイトを介しての複数同時自殺の実態と予防に関する研究, 平成16年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業）総括研究報告書, 2005.

5）吉原正治，岡本百合，内野悌司，　他：障がい学生支援における合理的配慮の調整過程に関する考察．総合保健科学，32: 25-29, 2016.

6）磯部典子，内野悌司，岡本百合，他：危機対応時の教職員コンサルテーション．CAMPUS HEALTH，47(1): 134-135, 2010.

資料

保健管理センター主催の学生相談シンポジウム・メンタルヘルス研修会			
年　度	開催	演　　題	講　師
2001年度	2月	自殺の予防と対応について	高橋祥友 （東京都精神医学総合研究所）
		学生のメンタルヘルスー九州大学での取り組み	峰松修（九州大学）
2002年度	1月	パーソナリティ障害の臨床	大野裕（慶応義塾大学）
	2月	不登校・ひきこもり等，適応に苦しむ学生への支援ー東北大学での取り組み	吉武清實（東北大学）
		九州国際大学におけるキャンパス・トータル・サポート・プログラムについて	窪田由紀（九州国際大学）
2003年度	2月	青年期における発達障害の理解と支援	辻井正次（中京大学）
		大学における発達障害学生の支援	木谷秀勝（山口大学）
	3月	うつ病とメンタルヘルスーストレス対策の最前線	山脇成人（広島大学）
		大学生の自殺	堀正士（筑波大学）
2004年度	2月	学生相談活動で思うこと	峰松修（九州大学）
	2月	学生の自殺予防	高橋祥友（防衛医科大学校）
2005年度	2月	大学生の自殺予防及びメンタル支援活動について—休学退学留年調査，自殺等死亡調査から考える	内田千代子（茨城大学）
	2月	自殺・自傷への対応	福田真也（東海大学）
2006年度	2月	修学・学生生活上の適応に苦しむ学生への支援	池田忠義（東北大学）
	3月	大学生のメンタルヘルスについて考えるー思春期・青年期心性の視点から	西村良二（福岡大学）
2007年度	2月	大学における事件・事故への緊急支援について	窪田由紀（九州産業大学）
		キャンパスライフのメンタルヘルス症候群	大西勝（岡山大学）
2008年度	2月	大学における事件・事故へのメンタルヘルス危機対応について	高石恭子（甲南大学）
2009年度	2月	これからの学生相談・学生支援	苫米地憲昭（国際基督教大学）
	2月	スクリーン精神医学ー映画で学ぶこころの病	高橋祥友（防衛医科大学校）
	2月	摂食障害の回復のプロセス	武田綾（NPO 法人のびの会）
2010年度	1月	摂食障害と共に生きる	切池信夫（大阪市立大学）
	2月	大学生活を振り返って（ソルトの場合）	ソルト氏（日本自閉症協会）
	3月	今どきの学生のこころとコミュニケーション	福盛英明（九州大学）
2011年度	9月	自傷行為の理解と援助	松本俊彦 （国立精神・神経医療研究センター）
	3月	キャンパスライフとメンタルヘルス	大西勝（岡山大学）
2012年度	7月	大学における自閉症スペクトラムの理解と支援	白尾直子 （広島県立総合精神保健福祉センター）
	9月	学生のうつの特色と対応法について	青木健次（京都大学）

2013年度	9月 3月	動作を用いたストレスマネジメント 学生のメンタルヘルスの対応について	坂上頼子（オフィスかけはし） 中村準一（鳥取大学）
2014年度	9月	大学生の自殺の実態と特徴 自殺のポストベンション－遺された人へのケア	内田千代子（福島大学） 高橋祥友（筑波大学）
2015年度	9月 2月	教職員とカウンセラーの連携・協働 摂食障害治療の最近の知見	吉武清實（東北大学） 河合啓介（九州大学）
全学 FD（学生支援教職員研修・メンタルヘルス相談研修会）			
2015年度	8月	学生のメンタルヘルス支援に向けて 障害のある学生への支援に向けて 教職員連携による学生支援－事例を通して考える	岡本百合（広島大学保健管理センター） 佐野眞理子 （広島大学アクセシビリティセンター） 磯部典子（広島大学保健管理センター）